
日本はきもの博物館収蔵資料紹介 ～ 17世紀の靴を中心に～

日本はきもの博物館学芸員(非常勤) 市田京子

はじめに

本誌No.154で、18世紀から20世紀までのヒールの変遷を通した靴の歴史を紹介させていただいた。そこで用いた靴の写真は日本はきもの博物館(広島県福山市)の所蔵品で、博物館所蔵の欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料441点とその時期についても記した。

靴の変遷は、爪先とヒールの形から追えるという。特に、18、19世紀にはその傾向が強く、細かい変化が時代を分けているようである。そういう点では、欧米の専門博物館に比するまでもなく、はきもの博物館の収蔵資料は年代や種類など限られる面があるのは否めないかもしれないが、博物館の収蔵資料を中心に、年代を追った紹介をして、靴の歴史をたどってみたい。

今回は、最初にそれまでの靴を簡単に紹介して、17世紀の靴を紹介する。

なお、掲載する写真は記載のないもの全てが日本はきもの博物館所蔵である。

1. 17世紀までの靴の変遷

地中海沿岸で栄えた古代ギリシャ・ローマではサンダル式のはきものが用いられたが、その後、北方民族の大移動により、ヨーロッパでは閉塞的な靴が定着していき、しだいに装飾性を増していく。

その靴の形態に大きな変化があったのは12世紀頃のこと、プーレーヌなどと呼ば

れた爪先を細く長く伸ばした靴(写真1、イタリアIssogne城出土)が流行する。そして、15世紀になると、反転、詰め物をして横幅を広くした爪先の靴が流行し、この時、甲に留めるためのストラップ・シューズが生まれたという。写真2は、19世紀に演劇のために作られた15世紀スタイルの靴であるが、特徴をよく伝えている。

それまでユニセックスだった靴に、女性



写真1. 爪先の細く伸びた靴／スイス Bally Shoe Museum 所蔵



写真2. 爪先が大きく広がった靴／フランス、19世紀の複製



写真3. 16世紀ヴェネチアで流行したチョピン
／『La chaussure』より



写真4. 17世紀のヒールのついた靴／『La
chaussure』より

用として登場したのが16世紀のチョピン（写真3）で、高さ50センチに達するものもあったという。足元を高くすることを求めたものであり、これがヒールの出現を促すことになったといえるだろう。ヒールの付いた靴は16世紀末に登場したといわれており、ヨーロッパの博物館には出現期の資料（写真4）も残されている。その靴の写真からは、踵部だけを高くして歩行可能な形を作ることはかなり困難だったことが推



写真5. ①・③ともトルクメン族の靴、②は①
の側面

測される。平らな靴底をヒールの前部から曲げるように下げてあり、爪先が接地しなかったのか、写真4では爪先部にも重ねた革が付けられている。

博物館収蔵品にこの時期の靴はないが、関連するようで興味深い資料があるので紹介してみたい。

それは中央アジアのカスピ海沿岸に居住するトルクメン族の、まさに取って付けたようなヒールの靴（写真5）である。厚い底革は爪先からヒール底まで一続きとなり、高さ7.0cmのヒールを付けた踵部は平らで、そこから角度をなして爪先に下りていく。平らな踵部のみ内底に別革をおき、③の内底にみえるように鉄釘や麻縄で接合してある。履くための困難を補うのであろう、①では靴底に入れた薄い板が残されている。

幅10.0cmと広い甲はグリーンのロバ革に毛糸の刺繍を施してあり、裏には絨毯（フェルト状で厚1.0cm）が張ってある。先端で丸くなる爪先は中央で尖り反る。ヒールの芯は木と思われ、黒革巻きである。

靴①は全長25.8×幅10.6×全高12.3cm、③は全長25.7cm。

2. 17世紀の資料

写真6はヒールの付かない女性用のミュールである。華奢で繊細な印象があり、底が非常に細く、実用されたのか疑念もわくが、甲部は幅7.2cm、履き口の高さも6.0cmあり、June Swann氏（注1）からも否定の言はなかった。16世紀末から17世紀初頭のイギリスのものである。

甲は芯の革にキャンバス地のような目の粗い麻布をあて、その上に刺繍をしたアイボリーのシルクサテンを重ねてあり、裏打ちも同色のシルクである。シルク糸とメタル糸の刺繍は、かなり劣化しているが、モチーフは「パンジーといも虫」といい、これはこの時期のイギリスの刺繍の特徴だという。履き口にはメタル糸のブレード飾りがつく。



写真6. 17世紀初頭頃のミュール／イギリス

台は、Swann氏によると、前部がコルク、後部が木で、厚みはそれぞれ0.7cm、2.7cmあり、赤い革が巻かれている。内底にはやや目の粗いシルクが張られ、外底は革（厚0.4cm）である。革の縫い糸は麻で、底には切れ目を入れて縫い糸を隠す技術がみられる。これは、日本の雪駄にも江戸時代に登場しており、切り廻しと称されている。底は左右同形であり、長さは22.0cm、幅は最も広い所で5.2cm、細い所で1.7cm、踵では3.6cmとなっている。

Swann氏によると、外底に3か所の小穴があくことと切り目が入ることから、17世紀、1610年頃のものではないかという。

靴の全長23.3×幅7.8×全高8.3cm。

写真7もイギリスの女性用ミュールである。この靴には由来書があり、使用者はDame Euphemia Conquerorで、彼女の出自と1665年3月13日にPerthshireのFingask城主 Sir Patrick Threiplandと結婚したこ



写真7. 1665年頃のミュール／イギリス

とが記されている。

甲は非常に深く、モスグリーンのシルク地に銀を巻いた白糸で「古代ベニスの金貨を縁取った日輪」の刺繍が施されている。芯は革で、裏打ちは白いシルク地である。長く伸びた爪先の先端が四角であることが時期的な特徴である。

底革は、やはり、爪先からヒール底まで一続きになっており、1.0cmと厚い革と甲部は太い麻糸で縫い合わされている。左右



写真8. 17世紀後半の透かし彫り木靴

同形であり、縫い目を隠す切れ目が入っている。ヒールの芯も木のように、内側は直線的に外側は曲線的になり、踵部から土踏まず部を経るカーブはやや緩やかになっている。ヒールの高さは6.0cmで、甲と同布が張られ、バック中央で縫い合わされている。内底には、前半分に白革、後半分に甲と同布が張られている。

このミュールの甲部は非常に深く、底部も爪先から10.7cm奥までと長い接地面となっているが、先端から5.0cm程は足の入った痕跡はない。側面写真にみえるように、やや緩やかになっているとはいえ、ヒール部から接地までは急角度を呈しており、そのバランスをとるために爪先にむかって長く伸びていると考えられる。

靴の全長26.3×幅8.4×全高8.2cm。

写真8は木靴である。一木から彫り出された優美な靴で、用途も、儀式に用いたかとは分らないが、特異であったと思われる。外面全体は金色に塗られており、内

側は、劣化しているが、赤に金色の水玉模様のような塗りになっている。

甲部には「花とぶどう蔓」という繊細な透かし彫りが施されている。爪先先端から7.5cm入った位置に鋸歯状の重なりが表現されており、脆さをカバーするためか、履き口とともに、針金状のものが通されている。底はオレンジに塗られ、爪先部は甲部の重なり部に続く底のように形作られ、塗りの痕跡はない。側面写真にみえるように、この爪先部は靴底の下に出ており、この資料では失われているが、ヒールの底部にまで達していたと思われる。いわば、ヒールのない写真6のような姿が推定できるのである。それを示す資料もドイツの博物館に収蔵されている（注2）。この靴はヒールを保護するために用いられたというパントフルを重ねた靴を模していると考えられる。

また、写真7と同様のヒールがきれいなカーブで下りる踵部は立ち上がりが浅く、この靴自体もフラットな靴を履いたまま履く、パントフルと同じオーバーシューズではなかったかとも思われる。底の形はほぼ左右同形であるが、靴全体では左右差が感じられる。

靴の全長25.5×幅8.5×全高10.7cm。

おわりに

ヒールの付いた靴を履きやすくするための工夫として、爪先が長く伸び、甲の覆いが深くなり、それが17世紀の靴のスタイルとなった。博物館には実物資料がないが、ルイ14世の肖像画などにみえる甲高くに付いたロゼッタ飾りは、甲を覆う舌革を押さえるフラップを結び留める実用性も持っていたと思われる。

日本でも市民権を得た「ミュール」は17世紀に豪華に装飾されたおしゃれなものになったといい、サロンや寝室などプライ

ベートな空間で履かれた。そういう意味では、街歩きなどにはふさわしくないといえるかもしれない。

今回は18世紀の靴を紹介する。

参考・引用文献

- 1) Jean-Paul Roux 『La chaussure』
ATELIER HACHETTE/MASSIN,
1980
- 2) Saskia Durian-Ress 『SCHUHE』
Bayerischen Nationalmuseum
Munche, 1991

注

- 1) June Swann氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わった方で、1994年日本はきもの博物館に来館。
- 2) 参考文献2の59～61ページ参照。